

---

# 『背中』

四二ヶ三 十三

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

背中

〔 $\tau$ 〕  
〔 $\Pi$ 〕

N  
7  
3  
4  
7  
E

【作者名】

四  
ヶ  
三  
十  
三

【おひさま】

「あれ、と僕は思う。

あれ、と僕は思

٦٩

(前書き)

『人を死に至らしめるのは絶望である』とか。  
この主人公はいつの時点で絶望したのでしょうか。

だれの脳中だらう

僕の前にある背中は見覚えがなくて、でも、そいつの手を握つて  
まなかまなか  
いるのは知りすぎている背中であった。

真中  
麻奈香。

ぼくの、いとしいひと。

知らない背中は麻奈香を引つ張っていく。僕は歩きたい。  
知らない背中は横断歩道まで麻奈香を連れて行く。僕は歩きたい。

いいかげんに、あるきたい。

黄色い車が麻奈香だけを轢いて、つぶやく音。  
音。オー。うー。

車のタイヤとアスファルト

臭い。二才。二才。

僕は歩きたい。歩けない。彼女の元に駆けつけたい。駆けつけられない。なにがなんだかわからなくなりたい。なれない。

清江集

ちくしょう俺よりも彼女を知らないくせに。俺よりも悲しまない

ふと、零れ落ちた眼球がこちらを向いた気がした。僕はもう、きみの大きな目が好きだよ、とは言えそうにないけれど、でもやつぱりきみが好きだよ。だい好きだよ。

でも、きみの田でわかつたことがふたつある。

きみは死んでしまった、といふこと。  
もうひとつま、これが夢であるといふこと。

夏といえども、僕が住んでいる地域は大雑把に言えば北海道。もつと細かく言えば道東なので暑さはあまり感じない。できるならば夏らしい気温を望むところではあるのだけれど、それはそれで汗ばむことが煩わしいので僕は寒さを望むだろう。喉元過ぎれば熱さを忘れる この言葉は用法が合っているのだろうか。ともかく僕はそんなことを思いながら課題を終わらせている。

僕は看護学校に通う北海道民。特異点なんてまったくない盆百な男。『平凡』と『普通』と『正常』を煮込んで浮いてきた『異常』というアクを掏つて、それらをどぞーと圧力ガマに入れて、ぐつぐついにはじめても『例外』というスパイズも振らずにそのままナベの中で三日放つておくつもりが三年間忘れられて捨てられるところをなんとかフタを開けてもらつて、ようやくできたよくな一般人。

せつかくの日曜日だけれど、僕は遊びに行くことはしない。看護学生は忙しいのだ。月曜日から実習という非常に実践的かつ面倒な授業が始まってしまい、その経過報告をパソコンで打ち込んでいるのだ。

それに、今日は出かける気分になれないのだった。

理由は、今日見た僕の夢が要因である。おかげで暑くもないのに脱水寸前まで汗は出し、その後に涙は出し、そのせいで鼻水は出るし、本当に脱水症状になるかと思つた。

彼女は死んでいない。

あくまで、夢で幻で空想で、起こっていない事なのだ。

僕は予知夢なんて特殊な能力は備えていないし、信じてもない。でも気にならないわけがない。結局僕は彼女に起きがけの電話をかけたのだった。僕は昼過ぎに起きたのでモーニングコールではなか

つたのだが、イブニングコールでも彼女は寝ていたらしく、寝ぼけた声が携帯電話の小さなスピーカーの振動盤から僕の耳までお届けされる。

誰でも「あなたが死ぬ夢を見た」なんて言わなければ面を食いつぶす。そして大抵の場合は一笑に付すだろう。一笑に付すだろうが、僕は少しでも彼女に嫌われる可能性は避けたかった。もしくは、声に出してしまえば現実になってしまつ。そんな倒錯に襲われたのかもしれない。僕は「まだ寝てたの?」と当たりも障りもない言葉をかける。

「べつにいいじゃん、休みの日ぐらい」彼女は答える。

「僕も今起きたんだけどね」言ひて、僕は笑う。

「そなんだー。どつたの?何か用事だつた?今日はチエと遊ぶ予定だつたから、デートの誘いならお断りしますよー」

「僕が一回でも誘つてから言つてほしいね…いや、課題終わらせたのかなーって思つて電話したよ」僕は嘘をつく。

「昨日のうちに終わつたー。私はキミみたいに日曜日に終わらせよう。杜撰<sup>すさん</sup>はしないのですよ」

「しないのですか

「しないのです」言つて、笑う彼女。

うん、わかつたよ、じゃあ明日学校でね、と僕は電話を切つて強張つた指をぼぐす。つい力が入つてしまつていたようだつた。

僕の緊張の仕方からもわかるように、彼女と付き合つていてるわけではない。同じ看護学校の友達としてのお付き合いならばしているのだが、僕はその他大勢に過ぎないのだろう。異性として意識はされていないようであるし、彼女は他の男性とも付き合いがある。わかつてはいる。

たとえ無駄だろうがたとえ無謀だろうが、惚れてしまったからには仕様がないのである。

さて、僕は彼女との電話で思い出した課題を今やつている。

彼女が生きていた。それは嬉しいことである。しかし人間という

ものは苦惱をする生物であり、ひとつ困難が去るとそこに残った困難を気にしてしまうものである。

つまりは、あの『背中』。

あの背中は、僕の知らない誰かなのであらう。

所詮、夢の話。  
所詮、幻の話。

しかしながら、僕には一人が仲睦まじく見えた。手を繋いで、寄り添つて、たどたどしい彼女の歩き方をうまくフォローするように。そう思つと、僕はたまらなくなる。たまらなく止まらなくなる。たまらなく止まらなくたらを踏む。

今日、彼女はチエ（同学校の後輩で、苗字は忘れた）と遊びに行つたのだろうか。本当はあの『背中』なのではないのか。

彼氏でもなんでもない僕ができることは、腹いせに、キーボードを打つ手を強めることでぐりいであつた。

心中穏やかでなくとも課題はできる。そして、課題を提出するといつことはその授業が終わつたこと、つまりは新しい授業に移るということである。

新しい授業の内容は『擬似体験学習』であった。身体に障害を持つ方、または妊婦さんの恐怖や危険性を認識するために手話を学んだり、おなかに重りを装着して暮らしづらさを意見したりする。本来ならばもう少し早めに行ははずの授業であったが、授業に違う道具を近所の中学校や高等学校に貸し出していたので運びが遅くなってしまったらしい。

僕はふうん、とも思わず体験学習に興じた。

手話体験。彼女の名前を手話で表現できるよになつた。

沐浴体験。彼女との子ができればいいと願つた。

妊婦体験。彼女にからかわれ、笑われた。

そして、視覚障害体験。

これはハチマキ状の布を田に当てる、介助者となるペアの者が『九時の方向に があります』と言つて机のある物を把握させる授業と、そのまま外に出ればどんな恐怖があるのかを知らせる授業であった。

「一緒に組もうかー。昨日、デート断っちゃったし?」

「僕はデートを申し込んでなんかないよ

本当はしたいけど。

介助者は体格がいいほう、被験者は体重の軽いほうが望ましいとの講師の助言を元に僕らはそれぞれの役を決める。どうやら介助者が先を進むため、ある程度力があるほうが都合がいい、との説明があった。

彼女が目隠しをする。僕はその手をひいていく。

彼女の手をひくのが『背中』でなくて本当によかつた、などと、僕は変なことを考える。僕は少し変なのかもしれない。でも、変でない人間でなんているだろうか。僕は一般人だけれど、いや、一般人だからこそ変であるのだ。変なところがない人というのは異常であるのではないのか?

僕はうすらぼんやりと考える。ああでも今僕は彼女の手を握っているんだ。彼女の白くてかわいらしくてシミなんてなくって、家事をしているわりにはすべすべで少し汗ばんでいて爪もぴかぴかな手を握っているんだ。なにか他のことを考えていないと緊張で歩き出すことすらできないだろう。

「ちよっと、手、痛いんですけどー」

あああごめんね痛かった? 声に出さなければ僕は謝罪して、少し手を緩める。

瞬間。

彼女は目隠しをしている。僕の手が引かれていく。

僕は何が起きたかわからない。彼女は轢かれていく。

黄色い車が前を進んでいた僕だけを避けて、後ろにいた彼女に追突する。そしてアスファルトに頭を強く打つ。ぱあ、と音がしたかと間違うほどに花が咲く。真っ赤っ赤の花。コンクリートの地味な灰色に、抽象画みたいに血で彩られた花が咲く。

あれ、と僕は思う。

This image shows a sheet of dot-grid paper. The grid consists of small black dots arranged in a regular pattern. A single, larger black circle, representing a hole punch, is located in the second column from the left and the second row from the top.

あれ、と僕は思ふ。

講師友達ケラスメイトか「まなか！まなか！」と叫んでいた  
僕には「まだが、まだか」と死神の轟に聞こえてこまう。

支那の歴史と文化

彼女は、一時の方向に四メートルくらい飛ばされていて、脳の肉から大腿骨まで見えそうなくらいひどい折れ方をしていて、というよりも頭は開頭手術をしたみたいに開いていた。真っ赤なのもピンク色のもの少し白いものも見えた。目はうつろだった。たまに口が動く以外は動かなくなつてて、そんな彼女もかわいいと純粋に思つた。僕は少し変なのかも知れない。でも変じやない人なんているのだろう

うか？

彼女が何か僕に対して言つてゐる気がする。

眼球が零れ落ちる。

彼女は口をぱくぱくさせるだけで何もわからない。いつものように元気な声ではない。これは果たして彼女なのか？

あなたがもうひとりいる、と彼女はなんとか命を振りしぼるよう  
に言った。その目が見ているのは僕らがさつきいた横断歩道の先だ  
った。今の僕は夢の僕なのだろうか。今あるものはすべては夢な

だろうか。本当の僕はこちらを見ていて、朝起きたら彼女に電話して、課題をこなしながら憤慨して、そして、また、彼女を殺してしまつのだろうか。

振り向くと、店の大きなガラス戸に張られた銀色テープの中の僕がこちらを睨んでいる。

そつか。

あれは僕の背中だつたんだ。

『背中』 / 完

(後書き)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7347e/>

---

『背中』

2010年10月11日16時01分発行